刊行に寄せて

大本山　高尾山　薬王院
貫首　大　山　隆　玄

當山が発行しております『高尾山報』には、東京都台東区の成就院御長老で、大正大学名誉教授であります福田亮成先生の文章が長らく連載されておりました。しかし、諸般の事情によりまして、次の執筆者を選ぶこととなり、福田先生との相談を経て、高尾山法類寺院の普済寺（栃木県さくら市）の御住職をつとめつつ、大正大学で教鞭をとる高橋秀城君に執筆をお願いすることになりました。

そして平成二十四年七月号から『高尾山報』において、「法の水茎」と題して連載がはじまり、八年の歳月を経て現在も続いております。

この「法の水茎」は、彼の専門である文学研究と僧侶という立場を合わせた視点から述べられたものであり、古の風雅な和歌を織り交ぜ、仏教説話や四季折々の仏教行事を紹介しつつ書かれています。言葉の端々に筆者の優しい性格が表れて、決して難しく書かれておらず、ほとんどの漢字にルビをつけるなど、読

みやすさに配慮しているのも嬉しく思われます。

令和二年十月号で連載が百回目となり、加筆・編纂をして本人より書籍としてまとめたいとのお話があり、高尾山も全面的に協力致すことにしました。

私は、ご先代の山本秀順大僧正のもとで、俳句をたしなむようになりましてから、自然の風物に雅（みやび）な趣（おもむき）を感じるようになり、人は「物のあわれ」というような美しい情操を身につけ、「あわれ」を知らなければ心なき人になってしまうと思うようになりました。

このたび、『法の水茎―和歌とおはなしでひもとく仏教―』と言う題名で発刊の運びとなり、この本が、すべての方々にとって古（いにしえ）から伝わる日本の和歌や仏教説話、昔話等を通して古人の雅（みやび）の情（こころ）に触れるものとなり、平安時代から現代までの世の有様を知る一助となりますことを、心から祈念する次第であります。

令和二年十一月吉祥日

巻頭言

私は毎年八月に入ると、先の大戦にかかわる書物を読むことを習慣としている。今年はコロナ禍による外出自粛の中、ナチスにかかわる『普通の人びと―ホロコーストと第一〇一警察予備大隊―』（ちくま学芸文庫）、『アイヒマン調書―ホロコーストを可能にした男―』（岩波現代文庫）、『戦争は女の顔をしていない』（岩波現代文庫）を読了した。そのあまりにも悲惨な様子に心が渇ききってしまい、途中何度も『西行全歌集』（岩波文庫）を手に取ったものであった。

西行（一一一八～九〇）は、平安末の歌人であり、密教僧でもあった。従来の和歌はもっぱら花鳥風月がテーマであったが、西行にいたり、深く心の底を穿った仏教的、密教的な視点からの歌をつくり、従来からの和歌の世界に一大転換をもたらしたといわれている。

弘法大師空海は、

真言秘蔵は経疏に隠密にして、図画を仮らざれば相伝すること能はず　（『御請来目録』）

と述べておられるが、西行にとっては、図画をば和歌にとらえなおしたにちがいない。それが、大きく和歌表現の内容も深化させ、和歌陀羅尼論まで生みだしたといえないだろうか。

そもそも仏教のめざすさとりの世界は、経論の多く指示するものであったが、さとりそのものの世界は、仏教語のみで明らかにすることは不可能であり、特に日本人のそれは、文学的な表現をとらざるをえない。弘法大師空海は、『三教指帰』の序文において、一の沙門からさずかった「虚空蔵求聞持法」を、四国の山野において修した暁に、体験した境界を、

谷響を惜まず　明星来影す

と、実に文学的である。これは、修業中の精神が感じ取った情景をそのままに述べたものにちがいない。もう一つあげてみよう。『即身成仏義』の三密加持速疾顕の説段において、大日如来と私達との〝彼此摂持〟ということを、加持という言葉の定規をもって、

如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影、衆生の心水に現ずるを加◎といい、行者の心水よく仏日を感ずるを持◎と名ける

と。これも深い宗教的な体験に裏附けされた、実に文学的な表現ではないだろうか。

弘法大師空海には、密教の内実をかたる教義書の外に、『文鏡秘府論』、『文筆眼心抄』の詩論書がある。それらは、同じ視点かつその両方を豊かに含んだ『性霊集』に自由自在に開陳されている。

本書は、髙橋秀城君が、『髙尾山報』に〝法の水茎〟として、一〇〇回の投稿原稿を、『法の水茎―和歌とおはなしでひもとく仏教―』として刊行されるものである。髙橋君が専門とする研究課題は、和歌を含む仏教文学である。そのような視点から密教への参入は、今迄あまりやられてこなかった貴重な成果である。熟読玩味し、髙橋君の思いを深く理解したいものである。

合掌

令和二年九月吉日

福田亮成　識

はじめに

いにしえの和歌やおはなしを読みながら、仏教の世界に分け入ってみませんか。日本の和歌や説話、物語といった文学作品を眺めてみると、いろいろなところに仏さまの教えがちりばめられていることに気づきます。仏教の教えを土台として書かれた作品も少なくありません。

例えば、このような歌があります。

仏も昔は人なりき　われらも終には仏なり　三身仏性具せる身と　知らざりけるこそあはれなれ

（後白河法皇撰『梁塵秘抄』）

これは、今から八五〇年ほど前の平安時代の終わり頃の流行歌です。心地よい七五調のリズムに乗せながら「仏さまも遠い昔は人でした。私たちもいつかは仏になります。ただ、この身体に仏さまの身体や心が備わっていると知らないで、仏道を気にかけないでいることが悲しく思われるよ」と詠っています。やわらかな言葉の中に、仏さまの深い教えが込められています。いにしえの人々は、いつも身近に仏さまを感じていたからこそ、このような歌を口ずさみ、自ずと広まっていったのでしょう。

本書のタイトル「法の水茎」は「法の水茎の跡」という言葉を略したものです。「法」は「仏法」を表

し、「水茎の跡」は「筆跡や手紙」を意味します。「仏教にまつわるお話」を集めたことから「法の水茎」と名づけました。お経はもちろんのこと、和歌や説話などの文学作品の中にも「法の水茎」は多く含まれています。「水茎の跡は千代もありなん」という諺もあるように、仏さまの心が込められた先人の「法の水茎」は、これからも時を超えて後世まで伝わっていくものでしょう。

本書は、仏教や文学について解説した入門書でもなく、仏教や文学の専門的な知識を身につけるものでもありません。古典文学作品を入り口として、仏教の深遠な教えに近づいていくことを目的としています。悩み多き現代を生きる私たちにとって、「法の水茎」は、時に心を慰め、時に心ゆたかな人生を歩むための道しるべとなるかもしれません。仏の教えに彩られた珠玉の言の葉に触れながら、皆さんとともに一歩ずつ仏の道を歩んでいきましょう。

なお本書は、東京都八王子市にある真言宗智山派大本山高尾山薬王院発行『高尾山報』に「法の水茎」として連載したものがもとになっています。この度一書にまとめるにあたり『法の水茎 ― 和歌とおはなしでひもとく仏教 ―』とし、各話のキーワードとなる仏教語の解説を加えました。合わせて末尾に「菩薩行」という亡き父の思い出を綴ったエッセイも加えました。

広く仏教や文学に関心を寄せる多くの方々に手に取っていただけますことを願っています。

目次

揮毫　大本山高尾山薬王院貫首　大山隆玄

刊行に寄せて　大本山高尾山薬王院貫首　大山隆玄　*i*

巻頭言　大正大学名誉教授　福田亮成　*iii*

はじめに ……*vii*

涙 1 かたじけない涙、高尾山の自然に抱かれて ……2

1 **五大（地・水・火・風・空）のお話**

水 2 滝行のご加護 ―『平家物語』「文覚荒行」、『古今集』「仮名序」― ……8

水 3 煩悩を洗い清める ― 頓阿『井蛙抄』、西行『山家集』― ……12

風 4 天狗の風 ― 長門本『平家物語』― ……16

風 5 お経の声は風の音 ― 頼瑜『真俗雑記問答鈔』― ……20

2 滝行のご加護

高尾なる緑もふかき法の山飯縄の御威永遠に変わらじ

これは高尾山薬王院の御詠歌です。「高尾山は深山幽谷の仏法のお山であり、ご本尊飯縄大権現のご威光は、永遠に変わることなく遍く照り輝いているよ」という歌心になるでしょう。

「御詠歌」とは、「仏の恩徳をたたえ、節を付けながら詠み上げる歌」のことです。西国三十三ヶ所や四国八十八ヶ所などの霊地を巡拝し、鈴の音色に包まれながら、お唱えされた方もいらっしゃるのではないでしょうか。ご本尊の御前で、心に仏を観じながら、一心に声高く歌う……その時、仏・菩薩が感応（信心が神仏に通じること）し、私たちの祈りを聞き入れてくれるのです。

御詠歌の起源については、はっきりしたことは分かっていません。ただ、平安時代中頃の花山天皇（九六八～一〇〇八）にまで遡る逸話があるようです。

熊野の那智の滝で千日滝籠行を行った花山天皇は、熊野権現の霊験に感謝し、修行の後に西国三十三ヶ所を巡礼しながら、行く先々で神仏に歌を手向けました。花山天皇は、滝行による仏・菩薩への報恩謝徳（恩徳に感謝すること）の思いを、五七五七七の三十一文字に託したのでしょう。後世の巡礼者が、和歌に節を付けて歌ったものが御詠歌の始まりと伝えられています。

那智の滝と言えば、文覚上人（一一三九～一二〇三）の滝の荒行も有名です。『平家物語』には、次のような話が語られています。

熊野に参詣し、那智籠りをした文覚は、二十一日の間に慈救呪（不動明王の真言の一つ）三十万遍を唱えるという大願を起して那智の滝に入っていきました。

季節は厳冬、雪が降り積もり、滝の落水も氷柱となる中、文覚は滝壺に首までつかって、ひたすら慈救呪を唱え続けます。

四・五日が過ぎると、堪えきれずに浮き上がり、下流に押し流されそうになりました。するとそこに突然、かわいらしい童子が現れ出て、手を取り引き上げてくれたのです。ところが文覚は滝から出ることなく、再び滝壺に戻っていきました。

そのさらに二日後、八人の童子（不動明王の使者である八大童子）が現れて文覚を引き上げようとしました。しかし、文覚は決して滝から出ようとしません。

三日目、ついに文覚は力尽きました。すると今度は、滝の上から天童二人が降り来たり、文覚の全身を

温かく香ばしい御手でお撫でになったのです。すると文覚は夢心地の中で息を吹き返しました。

天童は文覚に向かって語ります。「我々は、不動明王の使いの矜羯羅・制吒迦という童子である。明王より『文覚が大願を起し、勇猛の修行を行っているので擁護せよ』と命じられてやって来たのだ」と。文覚はこの示現によって二十一日間の大願を成就し、「刃の験者」（刃のように鋭く、効験あらたかな修験者）として世に知れわたったのでした。

（巻第五「文覚荒行」）

この勇猛精進（勇気をもって仏道を修行すること）の滝行によって、文覚は「刃の験者」として生まれ変わりました。その後は、神護寺や東寺、高野山大塔などの大きな真言寺院を次々と復興しています。不動明王の御加護が文覚を後押ししたのかもしれません。

このように勇ましく荒々しいイメージの文覚ですが、時には和歌も詠み出したようです。

ある日、文覚は歌五首を詠み、当時一流の歌人であった藤原定家（一一六二～一二四一）の許を訪れました。その文覚の歌を見た定家は、

「皆、その心珍重なり。仏法練行の心、和歌に通ず」

と文覚の歌を評しています（頓阿『井蛙抄』）。定家は、文覚の言葉の奥底にあるものを見極めていたのでしょう。文覚の和歌には、「仏道修行による仏の心」が込められていたというのです。

今回取り上げた花山天皇も文覚も、仏道修行（滝行）によって仏心が宿り、仏の教えに彩られた言葉（和歌）を発するようになりました。これは、何故なのでしょうか。

やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。

（『古今集』「仮名序」）

古来より日本では、「人の心を種」として生み出された和歌には、天地・鬼神までをも感動させる力があると信じられてきました。種（心）から発芽し、やがて葉（和歌）が生じます。しかし、そのままでは上手く生育しません。良い環境があってこそ、根と幹が立派に育ち、見事な花を咲かせ、色濃い葉を茂らせるのです。

おそらく花山天皇も文覚も、滝行によって心の垢（煩悩）をことごとく洗い流したのでしょう。仏のご威光が心の奥底にまで沁み透ったのではないかと考えます。「かたじけない」環境の中で、しっかりと根を這わせた木々には、さぞかし奥深い言葉が生い茂っていたでしょう。

お経を唱えることはもちろん、滝行も御詠歌も、私たちの信仰心と切り離すことはできません。皆様も仏の慈悲心と一体となり、「自身自仏」（この身即ち仏なり）のお姿に、自らを近づけてみてはいかがでしょうか。

（二〇一二年八月）